

## まえがき

本冊は Edwin G. Pulleyblank 著 *Outline of Classical Chinese Grammar* (Vancouver:UBC Press, 1995) の翻訳である。漢訳として孫景濤《古漢語語法綱要》2006年4月、語文出版社刊がある。

21世紀COEプログラムにおいて本冊を研究報告書として公にするのは、「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」の事業の一環として漢文訓読海外出張講義がおこなわれ、その比重が日ごとに大きくなってきているという事態に対応するためである。訓読学習は、ことからの性質上、中国古典文法と日本古典文法と、二つの文法を踏まえなければならない。

我々は先に『漢文文法と訓読処理』を研究報告書として刊行した。これは楊伯峻の《文言文法》を編訳したもので、いわば漢民族の視点から見た中国古典文法を紹介したものである。しかし、訓読教育の前提として欧米の日本学研究者に中国古典文法を紹介するには、やはり欧米人の手になる文法書を紹介するのが便宜というものである。そこで、今回は欧米でもっともよく読まれている文法書を翻訳して紹介する。もちろん、欧米の学習者が原書を英語で読むのは容易である。ただ、訓読教育の現場では、英語で書かれた文法概念用語を日本語で用いることになるのは当然のことであり、一方、本書の例文を訓読するとどうなるかを示すことも必要になってくる。したがって、本冊は教授者にとっても学習者にとっても、有益な工具書となることを信じて疑わない。

原書著者の Pulleyblank 教授は 1922 年生れ、カナダ・バンクーバー州立ブリティッシュコロンビア大学・アジア学科の名誉教授で、中国語学界における世界的な長老のお一人である。カナダ・アルベルタ大学で Classics の学部を卒業後、イギリスに渡りロンドン大学で Chinese の Ph. D. を取得する。その後、1948-53 ロンドン大学講師、1953-66 ケンブリッジ大学教授、1966-87 ブリティッシュコロンビア大学教授を歴任した。

Pulleyblank 教授の帯英中の研究テーマは唐代史であり、最初の著作は *The Background of the Rebellion of An Lu-shan* (『安祿山の乱の背景』邦訳なし:London:Oxford University Press, 1955) であった。唐代史研究から中国語史研究に転じたのは、学部学生時代に受講した印欧比較言語学への興味が続いていたからであり、また、イギリスの大学の学部生に中国古典を教える必要が生じたからである。

中国語の教師として教壇に立ったころ、まわりの教師たちの多くが「中国語に文法は無い」という決まり文句を口にするのに不満で、かえって現代中国語もその古代語も他の言語と同様にちゃんと文法の法則があるのだと確信するようになった。そこで古典文法の論文を二点ほど書いたが、その後、今度はより深い音韻体系の理解がなければ文法の問題を解くことは不可能だと思ひ至り、歴史音韻学を専攻するようになった由である。

歴史音韻学研究に転じてから、多数の論文を発表し、その集大成のひとつとして *Middle Chinese: A Study in Historical Phonology* (Vancouver:UBC Press, 1984) を刊行した。

隋唐の音韻体系の再構成としてはスウェーデンの B. Karlgren の成果が支配的であったが、Pulleyblank 教授は Karlgren に敬意を表しつつも彼はエラーを冒したという。つまり、宋代の韻図の音韻体系をもって直接に隋代の『切韻』に適応したのは誤りだとした。そこで、Pulleyblank 教授は宋代の韻図を使用して再構できる音韻体系を Late Middle Chinese (晩期中古漢語) とし、『切韻』を使用して再構できる音韻体系を Early Middle Chinese (早期中古漢語) として分離した。早期中古漢語は六朝の各首都で文人たちに使われた標準語であり、晩期中古漢語は唐の長安方言を基礎にした標準的な文学言語であるという。さらに、李白や白居易などの押韻を分析して、彼らは規範的な韻書にとらわれない枠組みで押韻していることなどを闡明した。

中古音の再構をはかる一方で、上古音についてもメスを入れ、つとに 1962 年に The Consonantal System of Old Chinese を発表している (Asia Major 9、漢訳は潘悟雲・徐文堪訳《上古漢語的補音系統》1999 年、中華書局)。そこでは、去声字が上古では -s 韻尾をもち、上声字が上古では -ʔ 韻尾をもっていた等をはじめとして、影響力の大きな説を展開している。その後を示された Pulleyblank 教授の上古音研究でもっともユニークなのは、上古主母音として ə と a の二種類のみをたてる説である。多くの言語に普遍的な i-a-u の三母音体系からみると (三母音といっても、その間に種々の中間的な母音が存在するが)、i や u を認めないのは奇異な体系であるが、i や u は主母音ではなく、主母音にのり代のように付加されるセミ母音であるとする (現代中国語の介音の i や u と同じ性格であるという)。しかもこの二種の主母音が、実は語彙や文法に大きな意味をもつと主張する。たとえば、a は “in” という意味を付加する形態素の役割をもったり (「於」の上古音には a の要素があるという)、「譚」dəm (～をかたる) が他動詞であれば、「談」dam (かたる) のように a がそれを自動詞化する機能をもつのだというのである。

二主母音説は中国の研究者にはあまり評判がよくない (鄭張尚芳《上古音系》2003 年、上海教育出版社など)。しかしながら、音韻学と文法学を統一的に考察しようとする姿勢は上古漢語の理解にとって大変貴重な姿勢である。本書は Outline を名乗ってはいるが、到るところに音韻観にもとづいた刺激的な解説がひそんでいることに留意されたい。

訳者の小方伴子氏は百忙のなか、やっかいな本書の訳文を仕上げてくれた。ただ、上に述べたように、本書は通り一遍の教科書ではない。訳者も監修者も気のつかない誤りがあることと思う。そういう意味では、本冊は Pulleyblank 文法の研究の第一段階を示したに過ぎない。いずれ、より完成度の高い訳書にするべく、さらに研究を続けるつもりである。

佐藤 進

\* Pulleyblank 教授の研究歴等については、ブリティッシュコロンビア大学のサイトにあ  
る 2003 年 5 月 6 日の教授自身の講演記録 LANGUAGE AND HISTORY を参照した。